日本経済新聞（朝刊）

2009年10月12日（月）

都市幻景 十選 □1

東京大学准教授　今橋　映子

ある都市が、時に神話的ともいえる相貌を帯びるのはなぜか。私は特に、パリと外国人芸術家たちとの関係を例にとって、この20年来研究してきた。その間パリとは言わず、妙に心に引っかかって、決して忘れられない映像の数々がある。「幻景」とは、単なる「幻想」ではない、そこにある確かな「現実感」が、現代の私たちの心の奥の何かを、呼び覚ましてくるのである。

◇

第1回は、パリのパンテオン（偉人廟）内部の壁画を紹介しよう。20世紀の大修復も終わって、現在公開中である。

ピュヴィ＝ド＝シャヴァンヌ（1824～1898）は、明治大正期日本の多くの画家、文学者たちに愛された。高村光太郎はこの壁画に「広大無辺の美」を感じ、島崎藤村はその前で「旅の淋しさ」を慰めている。黒田清輝はこの画家に直接、自分の作品の講評を求めた。

パリの守護聖人・ジュヌヴィエーヴの逸話を描いた連作の最後、眠れる街を見守る晩年の聖女を画家は想像する。

満月の夜、聖女は温かな心遣いで街を見下ろす。足許に咲くトルコ桔梗。静謐な画面と、冥想を誘う香気――しかしパリ城壁の彼方に、決して見えるはずのない海の存在が、私たちの眼を驚かす。それが全く自然な構図に取り込まれている点こそが、この画家の本領であった。

ピエール・ピュヴィ＝ド＝シャヴァンヌ
「眠れるパリを見守る聖ジュヌヴィエーヴ」（1898年）

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月15日（水）

都市幻景十選 2

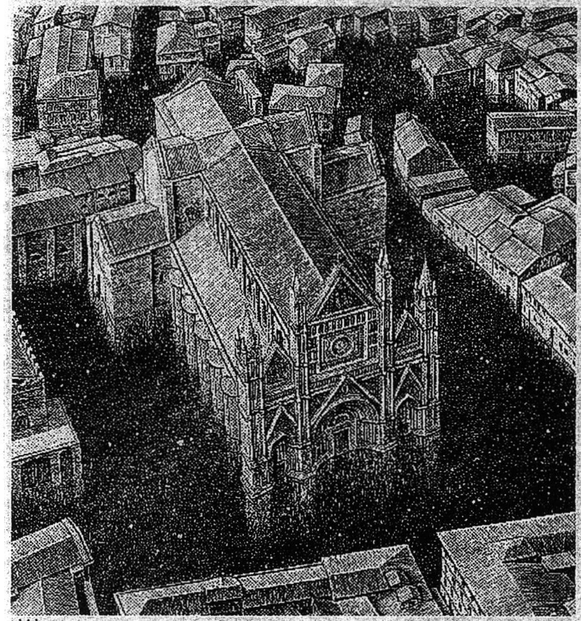
東京大学准教授　今橋　映子

その版画展の会場は、不思議な雰囲気に満ちていた。限りなく暗い展示室。一つの作品の前には、きっかり一人の観者が立ち、誰にも邪魔されず長い時間立ち尽くしている。貸し出されたルーペで心ゆくまで細部を観察する穏やかな時間。

そこで初めて出会った柄澤齊（1950〜）のこの作品は、まるで天啓のように私を打った。作家・出口裕弘の短編小説とのコラボレーション『迷宮の潭』所収版画、全10点中の1枚である。柄澤氏は、小口木版画の第一人者で知られる。木目の堅く詰まった輪切りの版木に、鋭利な刃で驚くべきほど精緻な線を刻んでいく。漆黒の闇に浮かび上がるかのような濃密な宇宙。同シリーズには街路に船が浮かび、航行するような映像もある。フランス19世紀の版画家、シャルル・メリヨンの世界が生き返ってきたかのようだ。しかしメリヨンのそこはかとない怪奇は無く、柄澤の作品にあるのは深い冥想。

ここはヨーロッパの都市だろうか。教会とその前の広場を空から見下ろす構図。自分が鳥にでもなった気持ちで、ゆったりと飛行していると、何と広場は星空ではないか。きらめく無数の星たちは、気づけば街全体を水のように浸している。

空は星の海だったのだ。（1981年、18・8×13・5センチ）



柄澤齊　譚画集「迷宮の潭」よりⅣ

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月16日（木）

都市幻景 十選 □3

東京大学准教授　今橋　映子

20世紀の、主にフランスで隆盛したシュルレアリスム絵画。しかしその「最良」の成果は、どこでもない、メキシコに生きた女性画家たちによってもたらされた――という勝手ながらの自説を、私は若い人たちの前で、披露することがある。

フリーダ・カーロ、レオノーラ・キャリントン、そして、本日紹介するレメディオス・バロ（1908～63）。キャリントンとバロは、メキシコへの亡命者だが、彼の地でこそ彼女たちの画才は花開いた。

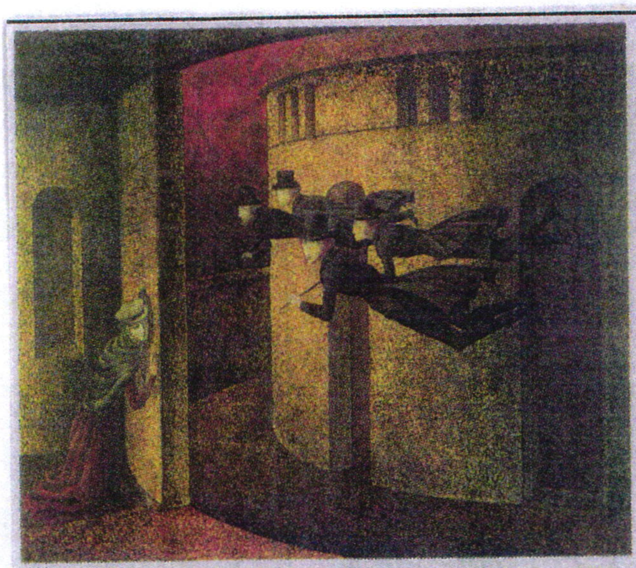
バロは、職人芸とも言うべき精緻な描写力で、夢や錬金術、占星術などにも通ずる内奥の秘密を描く。

〈飛行〉はバロの好んだテーマだ。彼女の画の中で、女たちはドレスを飛行物体に変容させる。

それにしても「行動する銀行家」とは何なのか。男たちはタキシードに身を包んだまま、事もなげに、しかも不気味にゆっくりと飛行する。その銀行家たちの一人が、こちらを警戒するようにじろりと睨むとき、なぜ私たちの方が、後ろめたい気分になるのだろうか。

都市の建築物は、どちらが内側で外側なのかも不明なまま、手前の女が隠れきることも出来ない不完全な砦だ。

こうして観る者に降り積もる問いの数々に一切の答えは、実は画の中にも外にも、無い。（1962年、油彩、メゾナイト、61×70㌢）



レメディオス・バロ
「行動する銀行家たち」

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月19日（月）

都市幻景 十選 □4

東京大学准教授　今橋　映子

20世紀という先の世紀の〈パリ神話〉を形成した何よりのメディアは、写真と映画だったといって良い（拙著『〈パリ写真〉の世紀』）。

そして写真家という職業の地位が低かった第2次大戦前のパリにおいて、むしろ活躍したのは、主にナチス政権から亡命してきた外国人写真家たちだった。彼らは異邦人のまなざしで、パリを撮る。観光名所ではなく、日常生活や都市周縁の事物や、下層の人々……愛情と驚異の視線で、パリの魅力を新たに引き出したのだった。彼らは一様に、斬新な構図や、細部を強調するようないわゆる「モダニズム」の技法で、都市写真の可能性を開拓した。

アーウィン・ブルーメンフェルド（1897〜1969）もまた、36年パリに亡命した写真家。ベルリン・ダダの主要メンバーとして活躍し、実験的映像の方がよく知られたが、亡命後のこの1枚は、ファッション雑誌『ヴォーグ』に掲載された会心作である。

エッフェル塔の高層部の度肝を抜くような撮影現場。決して合成映像ではない。

モデルはさして怖がる風もなく、むしろ全身に自由な風を受けて、スリルを楽しんでいるようにさえ見える。39年5月撮影。1年後パリはナチス・ドイツ軍によって占領され、写真家はアメリカへ再亡命した。

アーウィン・ブルーメンフェルド「リュシアン・ルロンのドレスを着たエッフェル塔の上のリザ・フォンサグリーヴ」（1939年）

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月20日（火）

都市幻景十選 □5

東京大学准教授　今橋　映子

人はある写真と不意打ちに出会う。ヨハン・ファン・デル・コイケン（1938～2001）のこの一枚は、私にとってそんな写真だった。オランダに生まれ、戦後パリに留学した彼は、生涯、写真と映画の双方を手放さなかった。

1956年、アメリカ出身のウィリアム・クラインの傑作写真集『ニューヨーク』が、コイケンにも決定打を与える。白黒の諧調のきついプリント、疎外者の眼差し、とはいえその都市特有のリズムを内面化し、ページを繰るごとに変幻する自在なデザイン。コイケンはクラインに倣い、「孤独が、影の苦しみと共にかたちを成すような、街中の場所を選ぶ」企てを、パリでこそ開始した。

代表的写真集『死すべきパリ』（63年）はその集大成。58年5月から10月に至る第五共和政成立期の記録がその中心をなし、この写真も、アルジェリア反乱でますます鮮明になったフランス植民地主義に対するデモの群衆を撮った一枚である。

ところが、どうだろう、デモに気を取られた母親と手をつないだ幼子の顔は、白く透き通って、あたかも宗教画のように神々しい。もしかするとこの子の魂はすでに天に召されているのではないか——その時、現実と呼ばれる生が死に反転する。

ヨハン・ファン・デル・コイケン「死すべきパリ」（1963年）

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月22日（木）

都市幻景 十選 □6

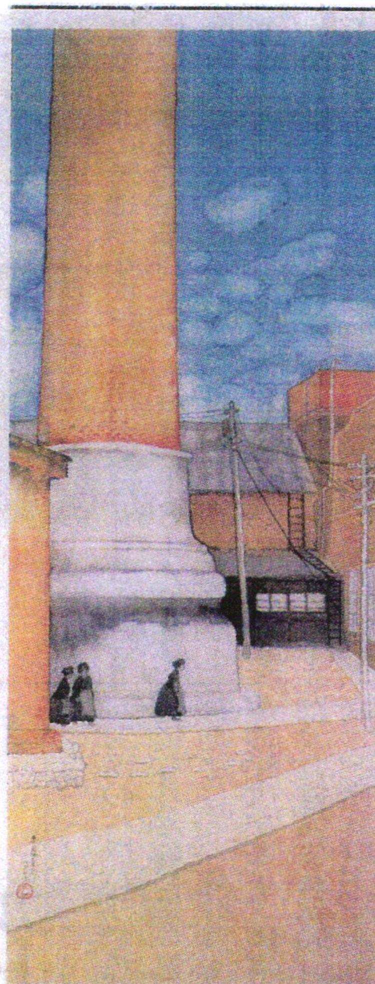
東京大学准教授　今橋　映子

この画家の名を「ハダ・テルオ」（1887〜1945）と読む。曰く、放浪とデカダンの中で娼婦たちに取材し、情念と哀感を誘う陰鬱な画を描いた異端画家——しかし秦テルヲは、人生の転機を迎える度に、画風や描法をダイナミックに転換し、自ら成熟していった。

特に結婚後、奈良に近い瓶原で描かれた風景画や、晩年の仏教画などに忘れ難い作品が多い。

「煙突」は、おそらく京都郊外か、神戸あたりに取材した一枚。秦テルヲの青年期、明治44年（1911）に描かれたいわゆる「日本画」である。伝統的な花鳥風月や美人画ではなく、「現代」都市の労働や貧困などを徹底取材し、西洋画の画法を取り込みながら新しい境地を拓くことはできないか——実はそれが、明治から大正期に「日本画」家たちが、積極的に考えたテーマだった。

それにしても、「煙突」の画面の鮮やかなレンガ色と空の水色に、私たちの目は釘付けになる。煙突と、建物と、地面の色がこれほど似通っているものだろうか。電信柱と電線のつながり具合など、画家は精密な観察も描き込みつつ、色遣いは、かくも大胆に構成する。そこに影のように通りすぎる女工たち。社会告発でなく、一篇の白昼夢のような風景が、ここにある。（110・5×42・2センチ、絹本着色、京都国立近代美術館蔵）



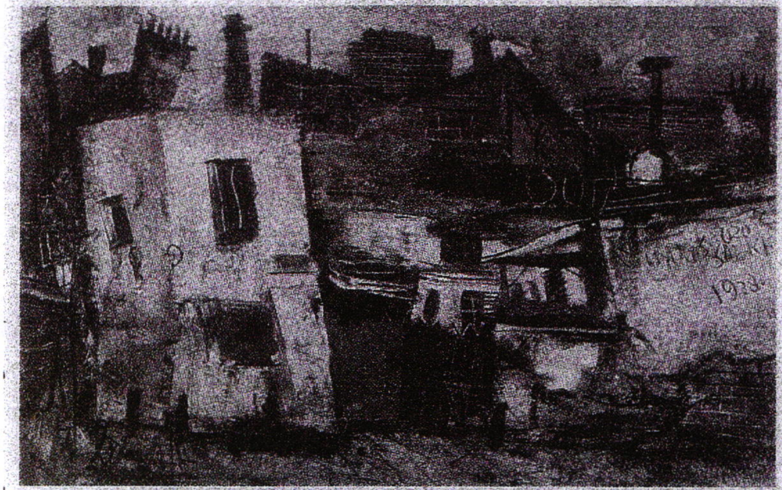
秦テルヲ「煙突」

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月23日（金）

都市幻景十選 7

東京大学准教授　今橋 映子



佐伯祐三「工場」

パリを描いた日本人画家……といえば、何といっても人気なのは、今でも佐伯祐三（1898～1928）と藤田嗣治だろう。パリの街と壁に魅せられ、広告のポスターに躍る文字を描き、そこに客死した「悲劇」の人。

もちろん30歳とは短命だ。しかし私はパリ研究の中で長年この画家に付き合ってきて、それ以上に佐伯祐三という画家が、思いもかけず「実験的」で、絶えず前進する画家であることに気づいた。極端に言えば、1点たりとも「同じ絵」は無いのである。

とりわけ、最晩年の1928年に制作された2点の油絵「工場」は、その技量の高さと完成度で、文字通り傑作と呼ぶにふさわしい。本日はそのうちの1枚を紹介しよう。複製ではわかりづらいが、実際この画の前に立つとすぐに気づくのが、画面の一番左側、向こうに回り込む道と通行人の姿だ。

工場の門、塀、建物などをありえないほど傾いた姿に分解し、それらをもう一度ジグソー・パズルのように組み合わせて構成する、というキュビスム的手法。署名もまた壁の落書きと化したかのようだ。画面中央の黒い部分、一度塗った絵の具の上に何やら引っ掻いたOUFの文字は何を意味するのか――それは私たちに謎となって問いかける。（油彩、カンバス、60×91ｾﾝﾁ、大阪市立近代美術館建設準備室蔵）

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月26日（月）

都市幻景 十選 □8

東京大学准教授　今橋　映子

「完全な都市」――こう題されたマックス・エルンスト（1891～1976）の油彩画は、1935年前後に、何点も存在している。

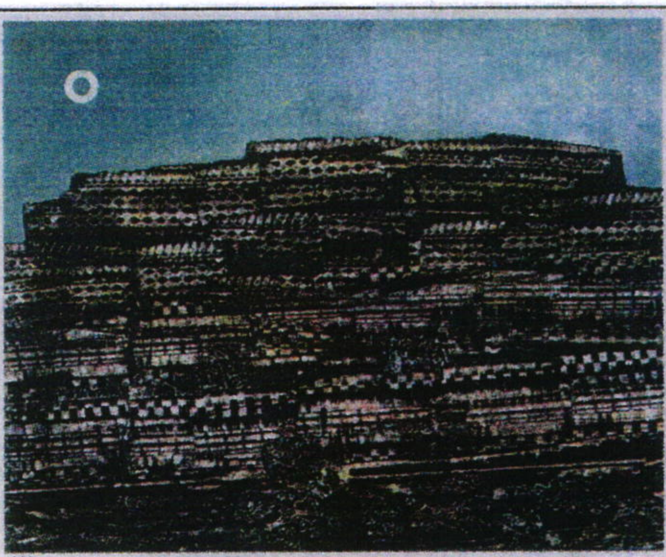
「完全な都市」――しかし私たちが知り得る情報はあまり多くない。この題名だけとも言える。

しかしこの画面の都市のどこが「完全」なのだろうか。ヨーロッパとも中央アジアとも見える外観からは、一切の「文明」の匂いが消えている。ここには現代的な相貌も、緑の影もまったくない。薄ぼんやりした月がかかる褐色の都市は、重装備の要塞にも、あるいはまったく逆に、廃墟にも見える。

菱形で連続模様を堅固に形作るかに見える上部の構造は、あちこちで崩れたり断裁されたりして、構築物の体を成していない。菱形模様は、下方では長方形に変化してさらに層を成している。

そして最下部に目を移すと、黒い画面に浮かび上がっているのは何と化石にも似た痕跡ではないか――そう思って全体を見渡すと、画面はにわかに一体性を失って、地層の堆積の切り口のような平面な顔を私たちにあらわす。化石模様は、絵画という「壁」に描かれた掻き絵でもある。

「完全な」都市とは、あらゆる廃墟の記憶、消え去った文明の痕跡の上に成り立つ夢のような装置なのではないだろうか。（1934年、油彩、カンバス、50・2×61・3ｾﾝﾁ、テート・ギャラリー蔵）



©Tate,London2009

マックス・エルンスト「完全な都市」

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月27日（火）

都市幻景 十選 □9

東京大学准教授 今橋 映子

ブラッサイ（1899〜1984）。本名をジュラ・ハラースといい、ハンガリー生まれ、パリに亡命してフランス国籍を取得した写真家である。異邦人の目でパリを撮り、ナチス占領下も危険を冒してパリに留まる。

その彼が、1930年以降、何と30年以上も撮り続けたのが、「パリの落書き」だった（拙著『ブラッサイ』）。

ほとんど執念とも言える情熱。ブラッサイはパリの壁に、名も無き人々の声や、夢想、反抗、無意識の欲望などを見た。

これは、ブラッサイの写真＋プレヴェールのコラージュ作品（無題）。

そう、あのシャンソン「枯葉」の詩人ジャック・プレヴェールは知る人ぞ知る、前衛的なコラージュ作家でもあった。プレヴェールは親友ブラッサイの落書き写真に啓示を受けて、雑誌か何かから拾ってきた別のイメージをその上に精妙に貼り込む。黒々とした落書きの宇宙から顕れ出る奇妙な牧神や悪魔たち……。

ある時、私はこの写真が撮られた場所を突き止めて茫然とした。パリ5区リュテス闘技場の遺跡の壁だというのである。となると、彼らは古代ローマ闘技場から甦ってきた化身たちなのか。

都市の古代を幻視する、詩人と写真家の精神の共同体こそ、両大戦間パリが生み出した豊かな遺産だったと言って良い。（制作年不詳、23×29セン）

ブラッサイ／プレヴェール「無題」

日本経済新聞（朝刊）

2009年10月28日（水）

都市幻景 十選 10

東京大学准教授 今橋 映子

第2次世界大戦の頃まで、パリ郊外には「ゾーン」と呼ばれる場所があった。かつての城壁のさらに外側の建築禁止地域をそう呼んだ。治安のために空き地にされたこの「ゾーン」は、住居を持たない人々や法に触れるような職業など、都市から排除される要素が雑多に入り交じる「危険地帯」ともなっていった。

日本ではロマンティックな「キス写真」家として知られる写真家ロベール・ドアノー（1912〜1994）は、パリ南郊の町に生まれ、一生「郊外人」を自認した人物である。彼はゾーンにも近い郊外に、愛情と憎悪の相半ばする感情を抱きつつ、しかしそこでこそ生きる現代人の日常感覚を、撮り続けた。東京郊外に生まれ育った私自身が、ドアノー写真に抱く既視感、それこそが現代世界の同一性を物語る。

この写真をよく見ると、奥の方にパリ市内最後の建物が見える。ここはまさしくパリ市とゾーンとの境界。汚い空き地に遊ぶ子供たちは、いつ捨てられたかと思うほど、もはや上部の型枠しか残っていない廃車を、得意満面に占拠している。ボンネットの上で、走れ！とばかり前方を見つめる子。風を受けて後方を振り返る子……悲惨な現実を未来の夢に変えるのは、いつの時代でも子供たちの想像力なのである。（1949年）

ロベール・ドアノー
「かつてのゾーンの端で（モンルージュ）」